

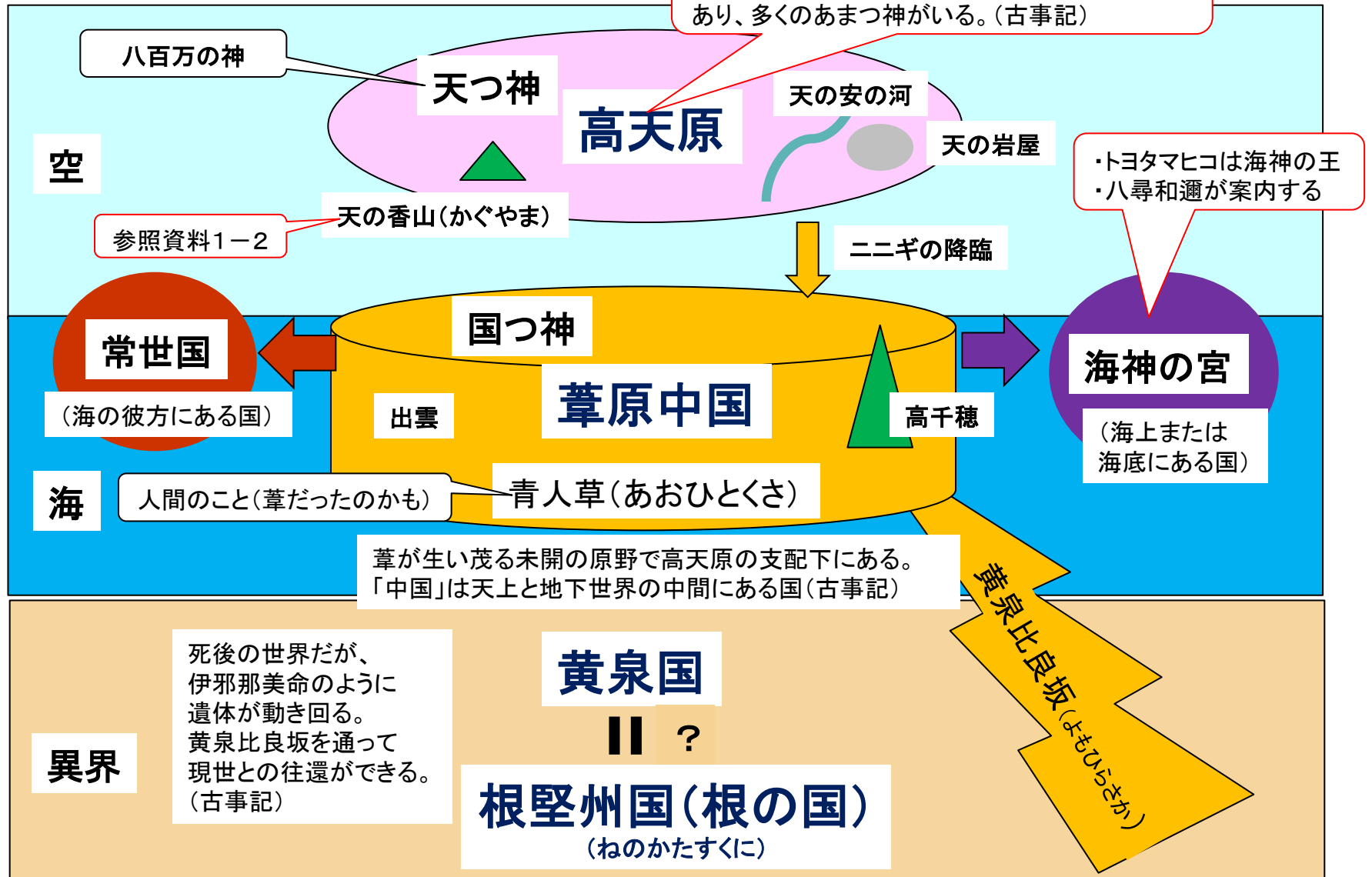
第1回 日本の3つのパンテノン

- ・高天原と葦原中国
- ・3つのパンテノン
- ・出雲伝説
- ・日向伝説
- ・大和伝説

中心出典:「古事記」(竹田恒泰 学研)、「日本書紀」(宇治谷孟 講談社)、
「古代日本」誕生の謎 武光誠 PHP文庫、
「日本の歴史 本当は何がすごいか」(田中英道著)、
「海道東征」をゆく (産経新聞社)

講師 井上正和

1. 神代の構造：高天原と葦原中国



2. 3つのパンテノン

(1) 日向パンテノン

アマテラス・・・⇒**瓊瓊杵尊** (ニニギニノミコト): 木花之佐久夜毘売 (コノハナサクヤヒメ) と結婚

大山津見 (オオヤマツミ) 命の娘

曾孫 (三代目)

-----> **神武天皇**: 伊須氣余理比売 (イスケヨリヒメ)

大神物主神の娘

(2) 出雲パンテノン

スサノオ・・・⇒**大国主命 (大黒様) = 大物主大神 (幸魂、奇魂) ⇒ 三輪山**

注記: 日本神道の一霊四魂 (人の心は4つの魂でできている)

- ・荒魂 (あらみたま): 勇気、荒々しさの神霊
- ・和魂 (にぎみたま): 親、親しみ交わる神霊
- ・幸魂: 愛、人を幸せにする神霊
- ・奇魂: 智、不思議な力で物事を成就する神霊

(3) 大和パンテノン

天火明命 (あめのほあかりのみこと) = **饒速日命** (ニギハヤヒノミコト)・・・⇒ (物部氏)

- ・神武東征後、大和朝廷に。
- ・三輪山の神を分祀する⇒**大神神社 (大物主神: 葦原中国の神)、**

参照資料1-3

伊勢神宮 (天照大神: 太陽神)、
大倭神社 (倭大国魂神: 大和の地主神)

檜原 (檜原) 神社が元伊勢

3. 出雲伝説

(1) 1世紀中葉に出雲文化は急速に発達

- * 弥生時代開始(紀元前10C)とともに北九州から稲作など弥生文明が出雲に伝わる。
 - ・出雲市原山遺跡、松江市石台遺跡で、北九州遠賀川式土器が出土した。
 - ・古代出雲は日本海沿岸の航路の中心で越前から越後までの「越(こし)」との交流も深い。
- * 弥生時代中期以降、出雲独自の文明に変わる。
 - ・弥生中庸以降、凹線文土器(口縁端部が凹形)などに替わる。
 - ・北九州との交流が途絶え、直接大陸交流？

(2) 2世紀中葉：出雲全盛期

出雲国家が史実であることが証明される。

参照資料1-4、5

①荒神谷遺跡からの358本の銅剣(中細形銅剣)の出土(1984年発掘)

- * この地は御神体となる銅剣を出雲の聖地の仏経山麓(ぶつけいさんろく)に集めた縁結びの祭祀が行なわれた場所
 - ・荒神谷の斜面に四列に納められた358本の銅剣の数は、出雲4地区の四郡、意宇(34本)、三郡(111本)、出雲郡(120本)、神門郡(73本)の神社数と一致する。
 - ・全国でも300本の発見しかない。
 - ・仏経山(神名火山)とは、出雲風土記では神の山と言われる。すべての古墳はこの山が見える位置に作られている。

②加茂岩倉遺跡からの38個の銅鐸(1996年発掘)

参照資料1-4

- * 全国でも一箇所で24個が最大であった。
 - ・この遺跡は近くに矢櫃(やびつ)神社跡があり、この土地の首長の所有物と考えるのが妥当と判断された
- * 2世紀中葉の大和朝廷成立前の大和、河内では同じ鋳型の銅鐸が出土。
 - ⇒当時の出雲先進文化との交流

(3) 国譲り神話(古事記)

考古学的には370年頃、4隅突出型古墳が消え大和の古墳に倣った前方後円墳が出雲に出現する。

* アマテラスは建御雷之男神(タテミカズチオノカミ)を出雲の大国主神に遣わして言う。

・「汝がうしはける(領有する)葦原中国(出雲)は我が御子(みこ:アマテラス)の知らず(治める)国であると任命(命ずる)なされた。汝の考えはいかが」

* 大国主神は2人の息子が決めることという。建御名方神が反対する。

- ・息子の事代主神(コシロヌシノカミ)は了承するが、建御名方神(タテミナカタノカミ)は反対する。
- ・建御名方神は建御雷之男神と力比べをして負ける。
諏訪まで逃げて諏訪神社の祭り神になる

参照資料1-6

* 大国主神は出雲大社を造らせる。

- ・「高天原に届くほどに千木を高く立てた、壮大な宮殿に私が住み、祭られることをお許してください。…」と求め、許される。
- ・三種の神器の「草薙の剣注」を天照大神に差し出すスサノオ逸話は、大王家に対する出雲の屈服を意味する。

(注)八岐大蛇が寝ている間に、「十拳剣」(とつかのつるぎ)と言う長い剣で頭と尾を斬り刻み、大蛇を倒すことに成功しました。尾を斬っているときに剣の刃が何かにあたり欠けてしまい、不思議に思ったタケハヤスサノオノミコトが斬り開いてみると、1振の剣が出てきます。それがのちに、草薙剣と呼ばれるようになる剣です。

- ・天穗日命(アメノホヒノミコト)の後裔が監視役として出雲国造と出雲大社宮司。現在は千家という。建御雷之男神の前に高天原から国譲りを説得に来て、出雲に同化した神である。

⇒戦争の痕跡はなく、国譲りは話し合いでの禪譲された。

4. 日向伝説(古事記から)

記紀ではいつも山が勝ち。海は朝鮮や大陸の渡来人か

(1) 高天原の出来事(天孫降臨): 神様の世界

- * 葦原中国の平定の報告を受けて、アマテラスは「葦原中国(出雲、大和)に降って、国を知らせ(治める)」と天忍穗耳命(アメノオシホミノミコト)に仰せられた。
- * 天忍穗耳命は「準備中に子供が生まれたので、子供の瓊瓊杵命(ニニギノミコト)を降ろすべき」と申し出る。
- * アマテラスはニニギノ命に三種の神器「八咫勾玉(ヤサカノマガタマ)」、「八咫鏡^注(ヤタノカガミ)」、「草薙剣(クサナギノツルギ)」を渡す。(注)一咫は婦人の開いた手の長さ(18cm位)で八咫は144cmの鏡の円周、直系46.5cm。
・「この鏡は、私の御魂としてわが身を祭るようにして拝みなさい」と仰せられる。
- * ニニギノ命は、猿田毘古神(国つ神)が案内役で、天宇受売神(アメノウズメノカミ)、思金神(オモイガネノカミ)、天手力男神(アメノテヂカラオノカミ)等を伴い高千穂の峰に降臨。
・天宇受売神は天岩戸での裸踊りで天照大御神を促した神、思金神は高天原の知恵袋で、天の安原で知恵を授けた神、天手力男神は天岩戸を手力で開き、天照大御神を引き出した神。

(2) 日向三代: 神の世から人の世へ

- * ニニギノ命は木花之佐久夜毘売(このはなさくやひめ)に一目ぼれして結婚。
・ニニギが一晩で生まれるのを疑うので、神の子なら火をつけてその中でも生まれるという。
・火の中で火照命(ほでののみこと: 海幸彦)、火遠理命(ほおりののみこと: 山幸彦)を生む。

参照資料1-7

- * 山幸彦は海幸彦に借りた釣り針を探しに海神の宮殿へ。豊玉毘売(とよたまひめ)に会う。
・海幸彦はなくした針を強く要求。困っているとき、そこに塩椎神(しおつちのかみ)が現れ、竹箆の船で海神の住む宮殿へ。
・豊玉毘売が身ごもり、生むために鵜の羽根を葦代わりにして産屋を作るが、産屋が葦きあえぬ間に生まれる。生まれた子供は鵜葦草葦不合命(うかやふきあえずのみこと)。

4. 日向伝説(古事記から)

(1) 高天原の出来事(天孫降臨): 神様の世界

- * 葦原中国の平定の報告を受けて、アマテラスは「葦原中国(出雲、大和)に降って、国を知らせ(治める)」と天忍穗耳命(あめのおしほみみのみこと)に仰せられた。
- * 天忍穗耳命は「準備中に子供が生まれたので、子供のニニギノミコトを降ろすべき」と申し出る。
- * アマテラスはニニギノ命に三種の神器「八咫勾玉(やさかのまがたま)」、「八咫鏡」、「草薙剣」を渡す。
「この鏡は、私の御魂としてわが身を祭るようにして拝みなさい」と仰せられる。
- * 猿田毘古神(国つ神)が案内役で、天宇受売神(あめのうずめのかみ)、思金神、天手力男神等を伴い高千穂の峰に降臨。

(2) 日向三代: 神の世から人の世へ

- * ニニギノ命は木花之佐久夜毘売(このはなさくやひめ)に一目ぼれして結婚。
 - ・ニニギが一晩で生まれるのを疑うので、姫は神の子なら火をつけてその中でも生まれるという。
 - ・一夜で身ごもり火の中で火照命(ほでのみこと: 海幸彦)、火遠理命(ほおりのみこと: 山幸彦)を生む。
 - * 山幸彦は海幸彦に借りた釣り針を探しに海神の宮殿へ。豊玉毘売(とよたまひめ)に会う。
 - ・豊玉毘売が身ごもり、生むために鵜の羽根を葦代わりにして産屋を作るが、産屋が葺きあえぬ間に生まれる。
 - ・生まれた子供は鵜葦草葺不合命(うかやふきあえずのみこと)。
 - ・豊玉毘売は元の姿の八尋和邇(やひろわに)での出産を山幸彦に見られ海神の宮殿に帰ってしまう。
 - ・記紀ではいつも山が勝ち。海が負ける。海は朝鮮や大陸の渡来人になる。
 - * 鵜葦草葺不合命は叔母の玉依毘売命を娶り、生んだ子が神倭伊波礼毘古命(カムイワレビコノミコ、後の神武天皇)
- ⇒この日向には西都原古墳群(4世紀初頭—中葉)が存在する

⇒神武東遷へ

参照資料1-8

5. 大和伝説

(1) 畿内の文化形成

- * 約1万5千年前: 北方からの大量の移住者の手で旧石器文化が持ち込まれ、縄文文化を作った。
- * 紀元前1000年前後: 支那の長江中下流からからの移住者が水稻耕作をもちこみ弥生文化を作った。
- * 紀元前後: 北九州から大量に西日本へ人口移動。
 - ・近畿地方独自の弥生文化が大和から河内にかけて作られ、この地域を畿内(うちつくに)と名付けていた。
 - ・瀬戸内海東側や山陰の各地区で出土する銅剣、銅矛、鉄器など北九州特有の祭器が畿内で出土することである。

(2) 饒速日命の大和への降臨

①天照大神が饒速日の命に授けたもの(先代旧事本紀)

- * 天羽羽矢(あめのはばや)、歩鞞(かちゆき)、「天璽瑞宝十種(あまつしるし-みずたからとくさ)」、
いわゆる十種神宝を授けている。
 - ・天羽羽矢と歩鞞とは、天孫の印であり「弓矢」と「矢を納める細長い筒」です。
 - ・天璽瑞宝十種とは、「天璽」、皇位の証としての鏡、玉、比礼(ひれ)など十種の神宝を言う。

* 饒速日命の随伴神

- ・饒速日命は、32 柱の将軍、5柱の部の長、5柱の造の長、25柱の軍部の長、船長、
かじ取りなどを率い、「天磐船(アマノイワフネ)」に乗って天降った。
32柱の将軍の中には、尾張の天香語山命(アマノカグヤマノミコト)、香取・鹿島神宮で祀ら
れている中臣氏の祖の天児屋命(アメノコヤネノミコト)、軍部の長には物部氏が居る。
⇒現実的観点で見ると、饒速日命は高天原(鹿島)を出発して、サルタヒコ系の海人の
案内で伊勢から直接奈良に向かったと思われる。

②饒速日命の天孫降臨は、「出雲の国譲り」の前の出来事である。

- * 先代旧事本紀には、饒速日命の天下りの時期は、大国主命の「国譲り神話」の前に記述される。
 - ・高天原系の出雲平定以前に、日高見国系(高天原)が大和を平定していたことになる。
- * 日本書紀でも、東征に向けて塩土老翁が伝える。
 - ・「東の方によい土地があって、青い山が取り巻いている。その中に天磐船(アマノイワフネ)に乗って、…そのとび降りてきた者は、饒速日(ニギハヤヒ)というものだろう。そこへ行って都をつくるにかぎる。」

(2) 纏向遺跡(3世紀初頭): 奈良盆地の統一が始まる。

①神武天皇へ長髓彦を従えた饒速日(ニギハヤヒ)命が臣下の礼をとる(古事記)

- ・もともとの大和の豪族。ニギハヤヒが降臨して妹を差出し従う

②九州から吉備を経て奈良盆地に移動した集団がヤマトを起こした

- * 特殊器台・特殊壺・孤紋円盤・鶏形木製品など祭祀用具が出土。
 - ・纏向遺跡、箸墓古墳(3世紀)で出土し、総社市宮前古墳出土品と類似する。
 - ・吉備では弥生後期から使用され、総社市古墳群が最古の出土。
 - ・前方後円墳の形は吉備の古墳(楯築弥生墳丘墓)が原型と言われる。大和創世記に吉備が活躍。

* 纏向遺跡出現まで栄えた4つの遺跡

- ・池上曾根遺跡(大阪府和泉市・泉大津市)、唐古・鍵遺跡(奈良市田原本町)、平等坊遺跡(天理市岩室)、大福遺跡(桜井市)・坪井遺跡(橿原市)の環濠集落。
- ・池上曾根遺跡から古代の神殿跡とみられる巨大な建物が見つかった。
- ・紀元前1世紀中葉ごろから大和や河内に造られ、3世紀初頭の動乱で解体した。
- ・その直後に古代都市「大和」(纏向遺跡)が出現する。

* 纏向への移住

- ・大和川を上って来た移住者は、既存勢力と争いを避けるために、飛鳥川方面に南下せず、巻向川に西進した。それは飛鳥を中心とする奈良盆地南部に弥生中期以前の遺跡が多いことで分かる。
- ・先住民の居た三輪、柳本を避けて、弥生後期に当る二世紀中葉から人々が纏向に住み始めた。纏向にある弥生後期初期の遺跡が少ないことがそれを裏付ける。
- ・3世紀初頭になると纏向の遺跡は急増する。それは吉備からの移住者によるものである。それは、大和が吉備固有の祭祀を受け入れたことで裏付けられる。
- ・3世紀初頭から、吉備の墳丘墓を原型とした纏向型前方後円墳が造られる。纏向石塚古墳、矢塚古墳、勝山古墳、東田大塚古墳、ホノケ山古墳の5基。
- ・しかも、割った銅鐸から分かるように、前代の近畿地方の祭祀をほとんど取り入れていない。
- ・大和朝廷は4世紀初頭に北九州を支配下に収めた。大和に大陸文化が急速に取り入れられることが裏付ける。その時から

* 纏向遺跡の特徴

- ・3世紀後半の纏向遺跡には大陸の影響がほとんど見られない。
- ・平城京と同等の敷地を持ち、大和の支配層は高床式住居に住む。三輪山からの上水道を整備。
- ・新嘗祭での交流：東は武蔵（東京都&埼玉県）から、西は長門（山口県）至る土器が発掘される。
- ・鋤は出土するが鍬はほとんどなく、農業の跡がない交易と政令都市。

⇒彼らが残した最大の遺跡が**纏向遺跡**（1971年発掘開始）。

③大陸文化の影響が少ない纏向遺跡

* 北九州と交易の無い集団が作った。

- ・北九州で見られる前漢鏡、銅矛、甕棺などはほとんど纏向では見られない。
- ・3世紀中葉に銅鐸が破壊されている。この支配者が銅鐸祭祀を否定した。この後は銅鏡祭祀へ。

＊大規模前方後円墳「箸墓古墳(278m)」を築く

- ・3世紀発生期の和朝廷では。神のお告げを聞く「神の妻(やまとととひもそひめ)」が最も力を持っていた。
- ・箸墓古墳構築の後頃から大王が体内に「天皇靈^注(すめらみこと)」を受けるといふ首長靈信仰が出来る。

(注)大嘗祭の「真床御衾(まどこおふすま)の儀

⇒天皇の古墳時代に入る。

(3)大和朝廷への経緯

◆3世紀後半：書記に、崇神天皇期に以下の記述がある

①第10代崇神天皇6年条

「天照大神・倭大国魂の二神を天皇の御殿の内にお祀りした。然れどもその神の勢いを畏(おそ)りて、共に住み給うに安からず。」とある。

- ・三輪山に集合されていた葦原中国の神、太陽の神、国津神(倭)を分離した。
- ・天照大神を皇女豊鍬入姫命(とよすきいりひめのみこと)に託し、大和の笠縫邑に祀った。
- ・倭大国魂神(やまとおおくにたまのかみ)は皇女淳名城入姫命(ぬなきいりひめのみこと)に祀らすが、大物主神の神託により大物主神の後裔である太田田根子へ変わる。

②崇神天皇9年9月9日条

＊四道将軍の派遣

参照資料1-9、10

- ・大彦命(おおびこのみこと)、武渟川別命(たけぬなかわわけのみこと)、吉備津彦命(きびつひこのみこと)、丹波道主命(たんばみちぬしのみこと)を四海道に遣わされた。詔して「もし教えに従わないものがあれば兵を以て打て」と。印綬を授かり将軍となる。
- ・勢力を四海道に広げ、「男の弭調(ゆはずのみつき)・女の手末調(たなずえのみつき)」と呼ばれる物納租税制度の成立

狩猟による獲物の税

布帛の類

◆4世紀：神の声を聞く巫女(神の妻)を崇めることを止め、大王自身が「天皇靈」を受ける形に変化。

⇒3世紀末の箸墓古墳は神の妻だがそれ以降は大王の墓になる。

◆ 5世紀：大和から河内の大和朝廷へ

- ・古代大和(纏向)は姿を消し、朝廷は河内に本拠地を移す。
- ・5世紀の古墳では大量の刀剣、甲冑、馬具、鉄製農具、金銀の装飾具が埋葬される。
⇒大王の性格が「司祭者」から「軍事的・政治的支配者」へ変化したことを物語る。
- ・応神天皇(第15代)－雄略天皇(第21代)時代に当たり、倭の五王時代と言われる。

◆ 6世紀－7世紀初頭：大和朝廷は飛鳥へ遷都。

- ・百済を通して六朝文化^注を取り入れ、聖徳太子のもと飛鳥文化を築く。
(注)現在の南京を都とした、魏・晋から南朝の宋・齊・梁・陳王朝までの六王朝で、漢文化が復興し、貴族によって老荘思想や仏教などの新しい思想を取り入れたことで展開された、中国文化史上の一時代。
- ・中国(隋)との国交を開いて仏教等の先進文明を取り入れ、古墳時代の終焉。
⇒信仰の対象は、巨大古墳としての首長信仰が無くなり、仏教の「阿弥陀如来」、「仏陀」に変更される。